

带状疱疹 (たいじょうほうしん) について

带状疱疹は、水痘 (すいとう) ウイルス (ヘルペスウイルス) の活性化によって発症します。大半の方は、幼児期に感染した水痘ウイルスを体内に持っており、極度の疲労やストレス等で、身体の免疫力を低下させてしまった時などにウイルスが活性化します。

症状としては、はじめ皮膚の違和感や鈍さを覚え、そのうち温度覚・痛覚が過敏になります。気付くと帯状に発疹・水疱が痛みを伴って出現します。

発症早期に皮膚科などを受診され、抗ウイルス剤を服用すると痛みの後遺症を残す確率が下がります。



带状疱疹後神経痛 (PHN) について

帯状に痛みを伴う発疹・水疱ができるので带状疱疹と呼ばれておりますが、この発疹・水疱も時間の経過と共に赤みが赤褐色に変わり疱疹自体は枯れて無くなります。しばらく赤褐色の後が皮膚に残りますが、徐々に元の状態に戻ります。しかし、皮膚の状態は回復しているにもかかわらず、痛みが残る場合があります。この痛みが残る状態を「带状疱疹後神経痛」と呼んでいます。

带状疱疹後の後遺症として痛みが残る原因は、皮膚の炎症ではなく、神経線維自体がウイルスによってダメージを受けているからです。

その後遺症としての痛み症状は、「風があたったり、衣服が触れるとビリッと痛む」「剣山でグサグサ刺されるように痛い」「体の奥でゴワゴワとした痛み」などと表現される、焼けるような痛み (灼熱痛) や電気が走るような痛み (電撃痛) となります。

带状疱疹後神経痛の一般的な治療

1. 免疫力の回復
休養、蛋白質の摂取、 γ -グロブリンの投与。
2. 薬物療法
抗うつ薬、抗てんかん薬、リドカイン製剤、オピオイド、カプサイシン
3. 神経ブロック
4. 脊髄電気刺激療法
硬膜外腔に電極を留置して脊髄を電気刺激することで痛みを緩和する治療

带状疱疹後神経痛に対する遠絡統合療法

带状疱疹後神経痛を治療する為には、ウイルスによって傷ついた脊髄・脊髄神経の神経線維を修復する事です。しかし、既存の医療では、神経線維を修復する為に有効な治療法がないとされています。

遠絡統合療法では、これまで複数年大学病院にも通院されても変わらなかった痛みがはじめて改善・解消されたという方が多数おられます。理由としては、既存の治療とは異なる方法で、神経線維を修復する力を引き出し、促す事ができるからです。

治療直後に多くの方に痛みの軽減を実感いただけます。治療の効果により、神経線維が修復される状態に身体が反応しているので、痛みが軽減します。継続治療によって神経線維が修復されるので、痛みが軽減・消失した状態が維持できるようになります。

带状疱疹の治療期間について

带状疱疹後神経痛の激痛は、神経線維のダメージによるもので修復には時間を要します。ライフフローを再建し、一時的に症状が軽減します。理由は、痛みを麻痺させているのではなく、患部のライフフローが治療効果によって良い状態になり、修復に向かう傾向になっているからです。つまり、継続治療により修復する力が維持されるようになるので、痛みもそれに準じて出なくなるのです。

早い方は治療開始後1か月で生活内の苦痛の軽減を実感されます。多くは3~6ヶ月程度で改善を実感されます。但し、破壊された神経線維が完全に修復されるには2~3年必要です。治療頻度は徐々に減らすことができます。

胸部にでる带状疱疹は、比較的早い時期から効果を確認できますが、腕や下腹部、下肢に出た带状疱疹の場合は、効果を確認できる時期が遅い傾向にあります。

遠絡統合医学では、神経機能の障害を神経細胞と神経線維に分けて分析しています。痛み症状は神経線維の障害になります。神経線維の障害が修復されるためには、血液やリンパ液、電解質が十分に循環する必要があります。遠絡統合医学では、神経系の伝達も含め、血液やリンパ液、電解質などの流れを総称してライフフローと呼んでいます。スムーズなライフフローが十分に確保されている事は自己の修復力、治癒力に直結します。遠絡統合療法の目的はライフフローを調整する事にあります。つまり、身体の自己治癒力を再建させる事になります。「長く患っている」「症状が変化しない」という状態の根本に対してのアプローチができます。

症例 1

50代 女性

仕事での過労により下腹部に発疹と痛みを発症、皮膚科で带状疱疹と診断をされました。ゾピラックスを処方されましたが、へそより下の右腹部に赤い斑点と剣山で刺されるような強烈な痛みが残りました。下着など衣服が触れる事によるビリッと電撃痛を常に抱え、睡眠障害も伴い鬱状態となっていました。

皮膚科からペインクリニックに変わり処方薬がリリカに変更となりましたが、痛みの軽減は見られませんでした。

遠絡統合療法での初回、治療直後に痛みの軽減が感じられ、半日程度効果が持続しました。効果の持続時間が短い為、週2回の頻度で継続治療を開始しました。

治療を継続して3か月程度で、ほとんど痛みを感じないで支障なく日常生活が送れるようになり、2週間に1回の治療頻度となりました。

症例 2

70代 男性

発症されてから1年が経過しての来院でした。痛みと痺れが右耳の後から頸、肩にありました。風に当たるとピリピリとした激痛があるとの事でした。発症してから複数の病院を転々としたが、全く軽快しなかったとの事でした。

初回の治療では、直後痛みと痺れは10→2と軽快。

5回目の治療では、痛みと痺れが感じないレベルまで効果が確認できました。持続時間は1日でした。

その後も、週2回で継続治療を実施し、3ヶ月程度の治療で、軽い痛みを1日の内数時間感じる程度となりました。

2年で全く痛みと痺れが出なくなったので治療は終了となっています。

解 説

帯状疱疹後神経痛は、多くの場合3～6ヶ月で生活に支障がなく、痛みを意識せずに生活できる状態になります。治療の目的は、ウイルスによって傷ついた神経線維が修復される状態に戻す事であり、痛みはその結果として無くなります。現代医学では、神経線維の修復は難しいとされていますが、遠絡統合療法によりライフフローを再建する事で、再び痛みのない生活に戻る事ができます。